

朝の講義開始前、理系研究棟のエレベーターは一種の戦場だ。一本乗り遅れば、教授が主催する朝のミーティングに遅刻し、研究室全体の空気を冷え込ませてしまう。僕は滑り込むようにして、満員のエレベーターに体を押し込んだ。

「ひっ……！ す、すみません……っ」

ぎゅうぎゅうに詰め込まれた密室。前後左右を学生や教員の体温に囲まれ、身動き一つ取れない。最悪なことに、僕の真後ろに立っているのは、この学内で最も若くして頂点に立つ天才——僕の直属の上司である中西教授だった。

（嘘だ……。なんで教授と同じタイミングに……。背後から感じる教授の静かな圧だけで、心臓が止まりそう……っ）

「……内山。また時間ギリギリか。研究者として、危機管理能力の欠如は致命的だよ」

耳元に降ってきたのは、低く、一切の感情を排した声。至近距離で感じる教授の清潔な石鹸のような香りと、わずかな吐息の熱さに、僕の背筋がゾクリと震えた。

教授の手には資料も鞆もない。おそらく一度外部の打ち合わせに出て、今戻ったところなのだろう。

「も、申し訳ありません……っ。データの整理に手間取って……っ」

「そう……」

教授の手が、僕の腰に添えられた。けれど、その手はスルスルとスラックスのベルトラインへと滑り、シャツの裾を割って、僕の秘められた肌へと直接触れてきた。

（えっ……！？ きょ、教授……っ！？ 何を……っ）

同乗している学生たちは、スマホを見たり、眠そうに目を閉じたりしている。誰も、一番奥にいる僕

たちの間で、教授の指が僕のアンダーウェアの中にまで侵入しているなんて気づいていない。

「あ、あ……っ」

教授の長い指が、僕のコンプレックスへと、迷いなく辿り着く。

僕は全人口の約15～17%にあたる、カントボーイだ。男性性を持つが、男性器はなく、女性器を持つ。カントボーイは性別・職業・社会階層に関係なく生まれるとされていて、役所への申告は義務で、学校や職場にも書類を提出しなければならない。

もちろん職場にも書類は提出していて、上司である中西教授もそれは当然知っているはずだった。

「っ……ひっ！？」

「……静かに。声を出さないのは、君の数少ない取り柄だろう。……僕が、君の『弛み』を正してあげているんだ。……光栄に思うことだね」

冷淡な言葉とは裏腹に、教授の指先は驚くほど熱い。指が僕の割れ目をなぞり、そのまま熱を持った中心部へと沈めた。

エレベーターの密室に、機械的な駆動音だけが低く響いている。教授は無言のまま、僕の背後からその熱い指先を、僕の柔らかいクリトリスへと這わせた。

(……っ、教授、なんで。こんな場所で……っ)

教授の指が、下着越しに僕の秘部の中心、一番過敏な突起を捉えた。そのまま、人差し指と親指で、クリトリスをむに♡と深く摘み上げる。

「っうん！？♡」

電流のような刺激が脳を灼く。僕は咄嗟に自分の口を手で覆い、漏れそうになる悲鳴を喉の奥で押し殺した。

「……誰かに聞かれないのか。それとも、見られたいのか」

耳元で低く、温度のない声が響く。教授はそれ以上何も言わず、ただ黙々と、僕の突起をむに♡むに♡と執拗に揉みほぐし始めた。指の腹で転がし、時にぐにり♡と指先を押し込むようにして、その快楽を僕の意識に刻み込んでいく。

（あ、あ……っ♡教授の指が、僕の変なところを触ってる……っ♡エレベーターの中なのに♡ぐにぐに、されて……っ♡♡）

教授の指は、観察するようにゆっくりと、けれど逃げ場を塞ぐように確実に動いている。薄い下着と粘膜が擦れ合い、じわり♡と熱い蜜が溢れ出してくるのがわかった。

「んん……っ♡あ、あ、んっ……っ♡」

必死に声を我慢しているのに、指先のむにむに♡
という柔らかな、それでいて容赦のない愛撫が、
僕の理性をじりじりと削っていく。

教授は僕の顔を見ることもなく、ただ無機質な階
数表示を見つめたまま、手元では残酷なほど丁寧な
蹂躪を続けていた。

ぐにり♡ むにゅっ♡ むにむに♡ むにむに♡

(だめ……っ、これ、声、出ちゃうよお……っ♡
教授……教授お……っ♡♡)

エレベーターが上昇する。階数が進むたびに人が
降りていき、いつかバレるのではないかという羞恥
心が限界まで募る。

むにゅっ♡ むにむに♡ むにむに♡ むにゅっ♡
むにむに♡

「うっ……ふ、うんんッッ！♡♡」

声にならない絶叫が、自分の手のひらの中に吸い

込まれていく。膝の力が抜けそうになるのを、背後から僕を支える教授の腕が、冷徹に、そして強固に繋ぎ止めていた。

「ふっ♡ う、うんんッ♡ んんッ♡♡」

（どうしよう、イっちゃう。僕、教授にイカされちゃう……っ♡♡）

全身がガクガクと震え始める。頂点に達しようとした瞬間、不意に教授の手が離れた。

ポーン、と無機質なチャイムが鳴り、目的の階に到着した。教授は何事もなかったかのように指を引き抜き、乱れた僕の服を整えた。

「……今日の実験、期待しているよ」

それだけを言い残し、教授は颯爽とエレベーターを降りて行った。僕は震える膝を必死に押さえながら、逃げるようにトイレへと向かった。

＊ ＊ ＊ ＊

昨日、あの後まともに研究に集中できなかった僕は、教授を避ける目的でいつもより一時間以上も早く出社した。

早朝の研究棟は静まり返り、冷たい空気だけが廊下に滞留している。

（よし……これなら、教授に会わずに済む。……あんなこと、朝からされたら、もう僕の心が持たない……っ）

安心してエレベーターの前で待っていると、後ろからゆっくりとした、聞き覚えのある足音が近づいてきた。その人物は僕のすぐ隣で止まり、足元には艶やかに磨かれた高級な革靴が見える。心臓がドクリと跳ね上がる。

「……おはよう」

最も会いたくなかった人——中西教授だった。

「あ……お、おはよう、ございます……」

「今日は早いね。殊勝な心がけだ」

「あ、ありがとう、ございます……」

低い、温度を一切感じさせない声。

エレベーターが到着し、逃げ場もなく、僕は教授の後に続いて乗り込んだ。教授は僕を一瞥もせず、僕の斜め後ろ、昨日と同じ位置に立った。

広いエレベーター内に、二人きり。扉が閉まると、密室の静寂がより一層濃密になり、昨日蹂躪されたばかりの場所が、疼くように熱を持ち始めた。

（なんで……。こんなに早く来たのに……っ）

上昇を始めた鉄の箱の中で、僕はただ、無機質な階数表示を食い入るように見つめていた。斜め後ろに立つ中西教授の視線が、後頭部にじりじりと突き刺さるようで、一秒でも早く目的のフロアに着いて

ほしいと祈る。

けれど、4階を過ぎたあたりで、胃の奥に響くような鈍い衝撃と共に、エレベーターが激しく垂直に揺れた。

「ひゃっ……！？」

情けない悲鳴を上げた瞬間、室内を照らしていた蛍光灯が瞬き、完全に消灯した。代わりに非常用の赤い予備灯がぼんやりと灯り、狭い室内を染め上げている。駆動音は消え、表示板の数字も闇に溶けた。僕たちは、地上数十メートルの空中で、世界から切り離された。

「……停まったね。復旧まで、少し時間がかかりそうだ」

教授の声は、驚くほど冷静だった。焦りも、苛立ちもない。暗闇の中でも、教授の知的な輪郭がはっきりと感じられる。

「あ……あの、教授……管理センターに、連絡を…
…非常ボタン、押しますね……っ」

「……必要ないよ。この棟の電気系統の不具合は、
僕が把握している範囲では10分以内に復旧する。今、
ボタンを押して守衛を呼び出したところで、結果は
同じだ。効率的じゃない」

「そ、そう、なんですか……」

「無駄な騒ぎを起こすより、この『待ち時間』を有
効に使おう。そうだろう？」

教授が、一步、また一步と距離を詰めてくる。壁
際に追い詰められ、背中の鏡の冷たさに震える僕の
腰を、大きな手が強引に引き寄せた。

「っう……！？ 教授……っ、だめ、です……っ、
こんな、場所……っ」

「……静かに。声を出せば、外部のインターホンが
この音を拾うよ。……それとも、大学の職員に、自
分の助教がこんな声で鳴いているのを聴かせたいの
かい？」

耳元で囁かれる、逃げ道のない正論。教授の言う通りだ。僕が騒げば、僕の「おかしい体質」が露呈してしまう。恐怖と羞恥で、僕は自分の唇を血が滲むほど強く噛み締めた。

教授は僕の抵抗を無視し、無言のままスラックスのフロントに手をかけた。シャツの裾が捲られ、おまんこが冷たい外気に晒される。そこに教授の指先が、つん♡と触れた。

「っんっ！♡」

ただ触れられたただけなのに、過敏な粘膜が跳ねる。教授は僕の反応を観察するように見つめ、もう片方の手で僕の秘部を左右に割り広げた。そこには昨日、教授に執拗に弄られた熱がまだ残っていて、指先が触れるたびに、じゅわり♡とした感覚が溢れ出す。

「あっ……っん！♡」

教授は無言のまま、人差し指と中指で僕の柔らか